

## パキスタンレポート(\*1)

---

橋戸ゆき(英国ブラッドフォード大学平和学部博士課程)

このレポートは、筆者がパキスタンイスラム共和国において2002年10月10日に行われた総選挙の際、国際選挙監視員として活動した結果の所見をまとめたものである。

### 背景

筆者は、日本のNGO団体「インターバンド」を通じタイに本部を置くNGO「ANFREL(Asian Network for Free Election)」主導のもと、パキスタンイスラム共和国(以後パキスタン)の国民議会(下院)の総選挙と4州議会選挙における選挙監視活動の一員として参加した。ANFRELの監視要員はアジア各国から参加した40名以上のメンバーで構成され、パキスタン人権委員会(HRCP)他現地NGOスタッフの現地コーディネーターとともに全国展開し、選挙監視業務を行った。

まずANFRELメンバー全員は首都イスラマバードでブリーフィングをし、パキスタン選挙委員会訪問等ののち、各担当地域に移動。筆者は、ペシャワールを拠点とし、北西辺境州(NWFP)にある2地域、ノシェラ(Nowshera)とマルダン(Mardan)を担当した。現地での情報収集から割り出した「注意を要する投票所」(\*2)のなかで、選挙当日に監視すべき投票所を特定した。10月10日の選挙当日筆者のチームは、投票所開所手続きと開票作業を含め、両地域合わせて11投票所(ノシェラ9、マルダン2)を監視した。

### 選挙結果

国全体の選挙結果としては、国民議会272議席(\*3)のうち、パキスタン・イスラム教徒連盟(PML-Q)が77議席、パキスタン人民党(PPP-P)63議席、そして統一協議会同盟(MMA)が45議席を獲得、3党とも議席過半数以上獲得には至らなかった。州議会はパンジャブでPML-Qが圧勝(128議席)、PPP-Pはシンディ(51議席)・パンジャブ(63議席)両州で票をのばし、MMAはバルチスタン(13議席)と特に北西辺境州(48議席)で勝利した>(\*4)全体的な投票率は、情報源によってまちまちだが、過半数に満たなかったというのが大方の見方である。選挙後初の議会は11月21日に開催され、1999年軍事クーデター以来初の文民政権を目指すべく、ザファルラ・カン・ジャマリ氏(PML-Q所属)が新首相に選出された>(\*5)

### 選挙行為と民主主義

選挙とは、民主化の過程において政治的、社会的、そして心理的に最も重要な行為のひとつだが、今回の選挙監視で、かえってパキスタンの民主化への道のりの長さを思い知らされた。もちろん選挙実

施イコール民主化完了ということはなく、どんな国でも民主化は自動的に起こらない。11月のイラクでの選挙は、ほぼ100%の投票率(当局発表)とはいえ、民主化の一步という理解は決して得られていない。選挙は、当該法にのっとり差別や不法行為のない、公正にかつ自由な環境で行われなければならない。では、公正で自由な選挙の果てにある民主主義とは何か？

現代社会ではどんな地域・文化・宗教・社会構造であれ、「民主主義」という言葉が、多くの人々が好むものという前提のもと、様々な状況で非常によく使われる。民主主義を求める声の大小にかかわらず、かつてないほど広範囲で議論されている。そこでは、「民主主義」はどう理解されているのだろうか？何をもってして民主的というのか？多種多様の意志と願いが「民主主義」という名のバスケットに一まとめにされている。

通常使われる「民主主義」という言葉の意味を大別すると、議論上の政治思想、執行されるべき政治システム、達成されるべき生き方、主張されるべき社会規範等に分かれる。民主主義の道徳的概念としては、すべての市民が民族、宗教、性別、社会的地位等に関わらず政治的社会的活動に自由で平等なかたちで参加できるべきであるとする。すなわちそれは、明示的であれ暗示的であれ社会正義と権利の概念に深く関わっている。従って、不平等・不正義にあえげばあえぐほど人々は民主主義を切望する、という一般的解釈が出来上がる。

今現在、ほとんどの国は自称民主的国家である。その真相の程度はさておき、政治システムとして完璧に機能する民主主義など存在しないことは誰もが百も承知である。なぜなら民主主義とは、完全には到達し得ない「状態」のことを言うのである。

では、パキスタンではどうだろうか？アメリカ、現職大統領、EU選挙監視団、宗教政党、現地NGO、一般市民が唱える「民主主義」はそれぞれ何をさしているのか？今回の選挙におけるそれぞれの「民主主義」の言葉の使い方を見てみると、そこにはだいたい2種類の意味で使われていることがわかる。EC選挙監視団が批判する達成され得ていない「民主主義」は政治制度としてのそれで、「市民が平等にかつ自由に参加・選択できる社会作り」(\*6)を目指す民主化活動は、生き方としてのそれであろう。

この生き方のしての民主主義を見てみると、独裁政権と民主政権との違いを、社会の底辺にいる一般民衆はどう見るか？HRCPの幹部がいていたように、独裁政権は直接支配に専念し、民主政権は政府を通した支配に専念する。支配形態の差は、底辺の人間の日常生活にどの程度の違いをもたらすのか？その答えは投票率の低さに反映しているといえるか？軍事独裁政権下のマイナス面を取上げるのはあまりに容易だ。が、中には軍事政権の方が腐敗した民主政権よりまだましだという声もある。  
(\*7)

国全体が経済難にあえぎ、援助植民地化の恐れを抱え、識字率が50%そこそこという状況で、イスラマバード近郊のある町は軍事産業特需のおかげで、識字率はほぼ100%、女性の教育・雇用機会も

ずば抜けて高い。イスラムと民主主義は相容れるか否かという議論の中で、イスラム教国で皮肉にも軍事政権が政教分離の担い手となり、いみじくも平等という社会正義の一要因を少しでもおしているのであれば、軍事政権イコール悪という単純図式では当てはめられない要素がそこに存在するのではないだろうか？もちろんその町はマイクロな例であり、軍事独裁政権はあくまで非民主的なのであるが。

それにもかかわらず、パキスタンの人々が切望する民主主義というのはどんなものなのか？自らが信じる宗教のもと、平等や自由という社会正義が行われている状態か？一般市民は民主主義に何を求めているのか？そして今回の選挙時のあきらめと不信の空気の中での低投票率と MMA の多数議席獲得は何を意味するのか？選挙の結果、人々の不安が募り国が返って不安定化したという見方もあるが、それは近視眼的評価であろう。国民が何を期待しているかをうまく汲み取り、自らの政党の政策・方針に蔽い絡めていく者が選挙に勝利するのも民主主義の側面の一つである。その結果を軍事政党、宗教政党という枠組みでしか見ず、選挙そのものの結果と直後の国の状況のみで、民主化の度合いを単純評価してしまうと今回の選挙の意味合いもだいぶ変わってくるのではないだろうか？

### 投票率と「うんざり感」

「民主主義」という言葉の意味をできるだけ広い意味で捉えるのであれば、その定義はギリシャ時代にさかのぼった「市民による統治」と言葉があてはまろう。ただ、そのあいまいな定義でさえ現代の自由民主主義システムに適合するかどうかは議論を残すところだろうが。理想と現実の関係がかつてない程もろくなっている。民主主義を求める声の高さと投票率の低さの関係が一例に挙げられる。潜在的原因がなんであれ、投票率の低さは全世界的傾向になりつつある。多くの西欧での選挙の投票率は50%いくかいかないかである。そしてその数字はパキスタンの今回の選挙でもしかり。先進国においてかつてない程広まった一般民衆と政策決定者との距離と、低投票率との悪循環。投票でもって政治参加をする50%だけの市民に期待をつなぐエリート民主主義を進めていくか、あるいは残りの50%の注意を引くことに政治的努力を傾けるか。民主化の程度は投票率だけでは測れないが、先進国における民主主義の土台はそれらが自負する通り堅牢なのだろうか？

そんななかで、何をもってしてパキスタンは民主化が遅れている国とするか？投票率低下の現象は西欧と同じであるが、それ以外のパターンは異なるとみられている。その一例として、パキスタンがムスリム国家であるがためキリスト教を由来とする様々な考え方が、「イスラムと民主主義は相容れない」と見ている傾向があげられる。それは事実か？一方で、パキスタン市民の多くは「民主化」を望んでいるとされる。それならば、西欧が唱える民主主義とは、ムスリムがのぞむ民主主義とは異なるのか？民主主義と相容れない要素は、西欧が声高に言うようにイスラムという宗教的要素からきているのか、それとも文化に根ざすものなのか？イスラム恐怖症がぶり返している今、MMA の多数議席獲得に対する西欧諸国の一般的な反応はまたしても「イスラム対民主主義」の枠組みから出るものではなかった。だが、MMA の「勝利」はただその宗教的要素だけから来ているわけではない。（\*8）今一度、近年の政治動向をみると、なぜパキスタンの民主化がすすんでいないとされるかが見えてくる。

過去二回にわたり、市民は自ら投票し選んだ民主政権に失望させられている。尚且つ、せっかく選挙で自分の意思を反映させたとしても、軍力によって覆された。かといってその民主政権は腐敗の度合いがひどく、軍事でなくても介入措置が必要になってしまった。一般市民が抱える政治に対する根深い失望と期待は今回の選挙でもあきらかになっている。

民主主義が根無しになっている現状の要因を求めるのに民族や宗教だけではなく、その歴史に着目する必要がある。パキスタンの人々は建国以来、民主主義を自分たちの伝統や歴史ひいてはアイデンティティの一部として作り上げていける機会をまだ得ていないのである。逆に、いままでの負の遺産「民主主義＝腐敗」という悪循環の構図を植え付けられてしまった。腐敗、汚職、権威主義は、決して宗教や文化だけに起因するのではない。人々の抱える「民主主義へのうんざり感」が、今回の選挙でも明らかになり、それが投票率の低さの原因の大きなひとつもなった。

もし10月10日の投票率をもっと高かったとしたら、選挙結果はどう変わり、またそれが今後のパキスタン社会にどう影響をあたえていたか？「民主主義へのうんざり感」を抱え、それに対する皮肉な態度がMMAの得票につながったのだろうか？

民主主義は、多様な意見を平等かつ自由に主張できる場を与える。MMA連立の中の一党でNGOの活動を批判・攻撃してきたイスラム原理主義のJUIにもその権利は平等に与えられる。宗教グループメンバーとNGOとの緊張関係をさらに悪化させるのは、民主主義そのものという皮肉である。

パキスタンにおける民主化の真の障害となっているのは、社会に深く根付いたエリート主義と法の支配の不在も挙げられるが、それに加え一般市民が自ら抱えざるを得なくなってしまう幻滅感と放棄へ思いもあるのではないか。

しかしながら、その「うんざり感」にもかかわらず、それに取って代わる政治的社会的システムを見つけかつ市民全体が同意しない限り、「民主化」はいつまでも終わることのないビジネスなのである。

## 治安と監視員の安全問題-“パラドックス”

当該政府の決定により、今回のANFRELの監視員全員に24時間体制の警察の護衛がついた。それぞれの監視担当地域に派遣された後の監視チームの行動は全て、1部隊6名で構成される自動小銃で武装した警察機動隊に同行、時には誘導された。筆者のチームは監視担当地域が2ヶ所且つ拠点が別の地域だったことから、機動隊の管轄が地域ごとに異なる性質上、結果的に多数の治安部隊と関わることとなった。意図的か否かは定かではないが、各地域の警察同士の連絡不手際もその数が増えた理由で、かつ多少の監視業務に支障がでた原因でもあった。

選挙当日前夜のかなり遅い時間にパキスタン軍関係者から、選挙当日は軍も護衛に当たることを当局が決定したとの報告を受けた。すなわち、選挙当日は当該地域の警察機動隊1部隊、そして軍の護衛

が1部隊ついた。しかも筆者のチームにはペシャワール警察の護衛部隊も終日つき、総勢武装護衛3部隊つきの選挙監視という事態になった。

パキスタンの治安情勢を十分考慮にいれつつ、政府派遣でないNGOの選挙監視にもかかわらず、これだけ武装した護衛がつき選挙監視をするという状態。確かに、路上犯罪や外国人誘拐等の犯罪からは非常に「安全」ということだ。が、この国はクーデターにより権力を掌握した軍事独裁政権のもとにあるわけで、武装した軍や警察(\*9)が、四六時中護衛という名で、民主化を推進すべく選挙監視を行うメンバーに張り付いている。そこには避け得ない、明らかなパラドックスがみられる。また、選挙監視活動の中立性と公平性にも影響を与える。

### 選挙教育と一般教育

筆者が接触をした全ての当局選挙関係者にとって、「選挙教育」という言葉の意味は、選挙に関わる公的スタッフ(治安警察を含む)へのタスクトレーニングとしか意味を成していなかった。「有権者教育」というマインドは一切なかった。こちらの有権者教育に関する問いに対し、一瞬なにを言っているかわからないよう顔になり、そして逆に「なんでそんなことを聞くのか」といぶかしげに聞き返す。有権者教育というマインドがない、という事実に対する彼らの共通した言い分がふたつあった。ひとつは、そんなものは国の選挙関係者がやるものではなく、政党かメディアがやるものである。テレビを見るなり新聞を読めばいいではないか。(15歳以上の識字率は約54%(\*10)。辺境地域の村でのテレビの普及率は都市のそれとは違う。)もうひとつは、パキスタンは過去に選挙を何度もやっていて誰も投票の仕方など百も承知だ、という。(最後に行われた総選挙は1997年で、今回の選挙から投票資格年齢が21歳から18歳に下がっており、今回初めて投票する若い有権者も数多い。)実際の投票所の様子を見る限り、識字率の低さだけでなく基本的な一般教育の欠如が、投票および選挙行為全般に根深く影響を及ぼしているのは明らかであった。資力の欠如が一番もつともらしい原因だろう。一般教育普及率が低ければ有権者教育の重要性も一層増すはずである。実際現場で起こった知識の無さが原因の多大な混乱と、その結果としての違法行為をかんがみれば、特定政党による有権者教育が公正でないとい概に弾劾もできない。少なくとも政党はそれをやる資力があるということであり、人々は投票の仕方を教わるのである。(当然その政党に投票するように仕向けられるわけだが。)ロゴにスタンプという投票方法も、低識字率対策としては唯一の解決策にはならない。社会的不平等が著しい国での有権者教育に対するインセンティブ欠如は、狭量なエリート主義と官僚主義から抜け出すために有権者に与えられた投票する権利を侵害することになる。

今回筆者が監視したNWFPではMMAが圧勝した。一党独裁でないのはある意味民主的だが、実際政策面でいくとどんなものなのか？MMAが望む男女分離教育の再開は、パキスタン社会にどう影響を及ぼすのか？性別、宗教による分離教育のマイナス面は、子供が「自分達対他者」という線引きをごく小さいときに教えられ、性別・宗教・文化等の異なる「他者」のことを学ぶ機会を得ず日常生活で接する機会が与えられない、ということだ。それはまさに不寛容のレシピである。他者と自分との共通点に目を向ける機会を得ず、逆にその違いだけを強調し、二者の間の溝を深める。それは、お互いへの不理解

となり、ステレオタイプを助長する。その過程はまさに、現代の地域紛争シナリオの第一章だ。（＊11）政治・経済・社会的に火種をたくさん抱えるパキスタンの将来をになう世代がどういう教育を必要としているのかを決定するのは、今の投票者たちの責任である。

一般民衆にのしかかっている「民主主義へのうんざり感」。それに加え、有権者教育の欠如がもたらす深淵な混乱、その結果としての違法行為という明白な事実。そんな中で、一般教育および選挙教育の普及に対する道徳的要請が、選挙に関わった国際・国内関係者に強く広まったのも事実である。

## 教育と社会変革

今回の選挙で全国に渡り投票所として使われたのは学校施設である。事前の情報収集と調査のため、監視員は投票所を数多く訪れたわけだが、監視業務以外に気づいた点があった。それは、学校施設の状態である。都市部の高等教育（中学・高校）施設はそれなりにレベルの高いところもあったが、小学校となると話が変わる。都市部と農村部両方の小学校は、学校と呼べるスペースを確保してあるだけまだましなのか。実際のどの程度その目的を果たすべく使われているかは別にして、「学ぶ」という行為をとて難くするような状態だった。教室内は昼間でも字を読むには暗く、土ぼこりでむせかえる。我々が訪れたのは10月で、一步教室に入り2分もすると全身からふきだす汗の玉で服がべっとり体につく。天井には扇風機もついていない。当然窓にはガラス、出入り口にはドアもないので、地域によっては冬は反対にかなり冷え込むことが容易に想像出来る。

識字率・教育普及率が低い国では初等教育が最重要である。筆者が訪れた村で、男女両方の子供がどの程度まで学校に通える状況にあるのかは不明だが、児童就労率が問題になっている中で、親が子供に教育を与えられる機会はどれだけあるのか？（＊12）

今回の選挙、それに続く政治・社会変化を引き継ぐのは子供たちなわけで、この国を将来どういう方向に向けていこうとするのかを考え実行する際に、指導者・有力者が自分たちの作り上げた遺産を荷う世代のことを、どの程度考慮しているのだろうか？ごく一部のエリート階級によって動かされている国は、例え経済状況がよくなったとしても、社会的側面は全く違う様相をみせることは、多くの国が実証済みである。

民主化は社会変革ももたらす。社会変革は政治動向に追従していただくだけでは十分ではない。すなわち選挙だけしたところで、目指すような社会変化が起こるわけではなく、悪くすれば逆方向にすすんでしまうこともある。教育を広く普及させその質を向上させたとしても、すぐに効果は現れないもので、社会変革および民主化への即効薬にはなりえない。教育そのものも逆の効用をもっていて、内容とやり方次第では不寛容や民族闘争を助長させる非常に都合のいい道具にもなる。長期的視野で次の世代にどんな遺産を残すかを考えれば、教育の途方も無い有効性が必然的に見えてくるはずである。

## 投票所における女性

イスラマバードの空港に着く前から機中ですでに出くわしていた男性のみの異質な世界に身を置いて数日。選挙当日訪れた女性専用投票所は、逆に全くもって女性の世界だった。

勿論女性は社会の中で絶対的に不平等に扱われ軽んじられている。社会的役割分担で女性が男性と平等という観念はそこにはない。しかしながら、女性としての社会的役割(それがたとえどんなものであれ)を全うする限り、社会の中で完全に無視されるというわけでもない。様々な役割を消極的または積極的に演じる女性たちがそこにいた。

男性投票所と比較すると、覆いで目隠しをされた女性の投票所は全くの別世界である。監視したほぼ全部の女性投票所は、混沌として祭りのような狂躁的な雰囲気に含まれていた。

この雰囲気は投票所開所すぐには始まらない。開所後も女性投票所はしばらくはもぬけのからだ。投票所にいた男女とも口をそろえて、女は家の仕事で朝は特に忙しい、という。10:00 を過ぎたころから外からは見えない女性投票所で「お祭り」が始まる。投票所は女性であふれかえっていたが、大多数は見ると中流階級の、未登録の政党エージェントであった。女性投票所ではこの中流階級の自称エージェントが、なにもかも取り仕切っていた。投票所周辺のコミュニティ内の実力者が先頭に立っているので、そこで展開される力関係はまさにコミュニティの縮図である。教室内のスタッフが陣取る受付と今にも崩れそうな机を積み上げただけの投票ブースよりも、廊下に各政党が陣取りして作ったミニ出張所のほうで、選挙活動がコントロールされているのである。

このようなお祭りの主導者である中流階級の女性たちが、投票所でまごついている彼女たちよりも社会的地位の低いであろう他の女性たちを圧倒しているのである。

西欧のメディアと人権団体が競ってパキスタンにおける女性に対する人権侵害を訴えている。その真の目的はさておき、多くの女性が突きつけられる現状に関して真剣に議論をしていく必要があるのは事実だ。ただ、それはこのレポートの目的ではないのでここでは差し控えるが、女性選挙監視員として明記しておきたいことは、いわゆる「男性優位社会で犠牲になっている女性」という単純なパターンだけでアプローチするのは危険だということだ。そこには社会的要因が根深く占められ、そしてそれは性別に関わらず選挙への姿勢と行動に反映されている。女性の中でもその社会的地位によって人権侵害や社会不正義の実践は多様性をもつ。投票所で見受けられた構図というのは男対女だけでなく、裕福層対貧困層、主要民族対少数民族、都市対農村、の構図であった。

### おわりにー外国選挙監視員の役割

外からの民主化への圧力の真の目的は様々で、当然政治的意図があることもある。選挙監視業務も十分に外圧による民主化の一手段といえる。ただし NGO 主導の監視は特に、「監視」するだけで強制措置も取らず内政に干渉もしない。ある意味では物理的政治的力のないか細い行為にも見える。しかも、当該国の短期的政治・社会状況に照らし合わせその効果を測定するのは難しい。また一方で、(社

会)変革のペースを強制することは、逆に変革によって誰も利益を享受できないシステムを作り上げていくことになってしまう。

外国人が選挙を監視するという行為の社会的影響はどんなものだろうか？ムスリムの国でしかも宗教的伝統が濃い地域で、女性として公共の場で活動する難しさのほかに、監視業務を行うにあたり考えさせられた点を2点ここで挙げておきたい。

まず第一点は、公平性と中立性の問題。平和学、紛争解決の世界ではごく知られたことであるが、この二つが今ほど問われ且つ危機にあることはない。勿論理想と現実の狭間にある深い隔たりは誰もが十分承知している。人道援助だろうが武力介入だろうが、よその国・地域に様々な手段で介入するときは、国際機関や NGO にしろ、現場で自らが選んだ判断と行動が中立的かどうかを明らかにするのは非常に難しい。理想と大義名分に彩られて輝きを放っていた中立性と公平性は、いまやそのメッキもはがれている。緊急援助や平和構築などの人道援助、そして開発援助にしろ、絶対的な中立性や公平さというのは存在し得ない。ある一定の程度では、中立性と公平さは相反する概念にもなってしまうのである。

一部の地域を除いて、パキスタン国全体としては現在戦争状態にあるわけではないが、外国からやってきて選挙監視をする際にはこの中立性と公平性はやはり考慮すべき点である。選挙監視という業務はあくまで監視で、当該国の選挙プロセスに介入することが目的ではない。かといって、口出ししなければそれで中立ということにはならない。NGO でも政府派遣でも関わった団体は、最終的には監視結果を公表する。ただ監視するだけとはいえ、当該政府、選挙委員会とそのスタッフ、各政党、そして一般市民に外国人選挙監視員のプレゼンスを知らしめるだけでも、その影響は大きい。いい意味では、不法行為がなされるのを予防しようという重要な利点がある一方、厳格な意味での中立性をすでに侵していることになる。

第二点は、「文化的配慮」。外の世界からやってきたらその土地の文化を理解するよう努めつつ十分に考慮に入れ活動をする、という考え方。現在各地で起こっている様々な紛争の根深い要因のひとつとして捉えられているからだけではないが、平和をめざして活動する人々というのは、現地の宗教・民族・言語・伝統・歴史等を全て含めた意味での「文化」にことさら敏感なはずである。では、どう行動すべきか？これの一番単純な実行方法は、「現地の人ができるようにやる」というのがある。ただ、どんなに事前情報を入手しようが文化などというものは短期間に理解掌握できるものではない。外の世界から来るものにとっては、現地の文化に対する自らの無知から自動的に自責の念にとらわれる。「文化の違い」は大なり小なり期間を問わずどこにいても付きまとう。

選挙監視という業務が超短期間という事もあり、今回の選挙監視活動では、この「文化的配慮」への責任感とパキスタン文化への無知に対する罪悪感が混在し、終始筆者につきまとっていた。選挙監視業務を行うに当たり、自らが外国人であることを意図的にそして女性であることを意思に反しさらす場面に何度も遭遇した。そこには「現地の人ができるようにやる」という単純な方法は通用しない。イスラム伝



統の強い地域では女性は公の場にはいない。自分も女性だからといって、彼女たちの生活パターンに従うのは、長期滞在では価値のあることだろうが、短期の選挙監視活動では難しい。もちろん公の場や交流の場では最大限の配慮をするが、結果的には「文化的配慮」をしていないともとれる。この矛盾とパラドックスに満ちた状況のなかで、選挙監視業務が干渉することでなくあくまで監視というソフトアプローチだということが、唯一の道理をもたらした感がある。外国人であることの罪悪感と、逆に外国人という前提だからこそできたであろうというかすかな安堵感は、複雑に織り交ざったままである。

国際選挙監視員とはなにか、という自問はいまだ続いている。自分自身が経験したことは個人レベルでは大変貴重で数多くのことを学んだと自負できるが、一方で自分がどの程度現地の人々に貢献できたのかということになると、正直言って今の段階では都合のいい答えはなかなか思いつかない。パキスタン滞在中に、人権や民主化に強くコミットし活動している現地 NGO スタッフと交流し活動をともにした。我々が現地を離れた後も、その交流は続き、意見交換や選挙後の国の政治的社会的変化の情報収集は続く。一番華々しい場面が終わり、やりっぱなしにしてしまうのは簡単だが、そのあとのフォローアップの期間とて、選挙監視業務の重要な一部であると考え。文化や理解の違いを超えて、現地 NGO スタッフと共に、パキスタン社会の今後を見つめていって始めて、自分がどれだけ貢献できたかという答えが見つかるような気がする。

---

( \* 1 ) このレポートはあくまで筆者個人的な見解であり、当該活動に関わったパキスタン当局およびその当該選挙関係者、国際団体、現地団体そして個人等とは一切関係がなく、特定の団体や個人の政策、思想、政治的見解に対し賛同もしくは批判する目的は一切無い。またこのレポートは学術的目的でかかれてはいないので、その文書形態・内容・方法論はそれのものとは異なる。

( \* 2 ) 「注意を要する投票所」のノウシェラとマルダンの選挙関係者と警察による位置付けは、①過去に暴力行為や著しい違法行為があった投票所、②政党もしくは候補者同士の競争が激しい投票所、③登録有権者の数が多いこと、の3つに分かれる。

( \* 3 ) 女性枠 30 議席、少数民族枠 10 議席を除く。

( \* 4 ) パキスタン選挙委員会発表による。

( \* 5 ) 2002 年 11 月 30 日現在。

( \* 6 ) 現地の民主化 NGO スタッフ談 (2002 年 10 月 11 日イスラマバード)

( \* 7 ) 一般市民へのインタビュー (2002 年 10 月 11 日イスラマバード)

( \* 8 ) MMA の勝利要因として、政治的には①PPP と PML(L) が力を失うと同時に生じた政治空間を右派が利用した、②MMA が持つ宗教色に対する西欧の懸念をムシャラフが利用し、トライバルエリアコ

ントロールに利用する、③またそれを目的として自らの力を保持する言い訳を作る、という解釈がパキスタン国内にある。また社会的要因としては、マドラサの普及、開発の遅れからの現政権への不満と失望から、とくに今回選挙権をはじめて得た若い世代が宗教のよとの平等と社会正義に耳を傾けるようになった、という見方もある。

( \* 9)この警察機動隊は非常時のみ編成される。今回の選挙の為、「群集コントロール」などの特別訓練も施されている。

( \* 10)2002 年 11 月現在の EU 発表による。

( \* 11)異なる人種、民族、宗教間の争いは、まず相手と自分を区別することから始め、その違いだけに目をむける。そして相手側に受け入れがたいものとしてのイメージをうえつけ、敵としてのプロフィールを作り上げていく。プロパガンダにささえられ、非人間化のプロセスをたどれば、昨日までの隣人でも殺すことができるようになるのである。

( \* 12)パキスタンでは初等教育は義務教育ではない。

---

[▲ Page Top](#)